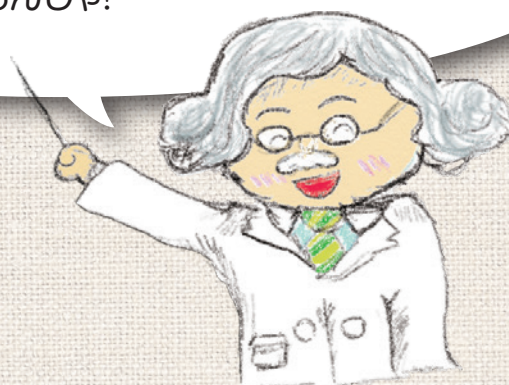




クラシックって楽しいな!

(作曲家にまつわるエトセトラ)

クラシック音楽ってとっても親しみやすいものなんじゃ。
クラシックにかかわる作曲家のことを知れば、もっとクラシックを
身近に感じることができるんじゃ!



 公益社団法人国際音楽交流協会

〒602-0894 京都市上京区上御霊仲町 457-10
TEL : 075-414-1311 URL : <http://www.imea.or.jp>

このパンフレットは、**宝くじ**の社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



1700

1800

ヴィヴァルディ(1678-1741)

バッハ(1685-1750)

スカルラッティ(1685-1757)

モーツァルト(1756-1791)

ベートーヴェン(1770-1827)

ハイドン(1732-1809)

パガニーニ(1782-1840)

ロッシニ(1792-1868)

シューベルト(1797-1828)

ベルリオーズ(1803-1869)

メンデルスゾーン(1809-1847)

ショパン(1810-1849)

シューマン(1810-1856)

リスト(1811-1886)

ワーグナー(1813-1883)

ヴェルディ(1813-1901)

スメタナ(1824-1906)

ブルック(1824-1896)

鉄道の開通により、
芸術家達の活動範囲が一気に
ひろがったんじゃない！



国際連合設置(1945)

ドイツ初の長距離鉄道開通(1839)
ライプツィヒ・ドレスデンで

イギリスがシンガポールを占領(1819)

神聖ローマ帝国が滅亡(1806)
ナポレオンがフランス第二帝政の皇帝に即位(1804)

ワシントンがアメリカ合衆国初代大統領に就任・フランス革命(1789)

アメリカで独立戦争(1775)

イギリスの産業革命(1760-1840)

スウィフトが「ガリバー旅行記」を著す(1726)

ニュートンが「万有引力の法則」を発見(1687)
フランス王ルイ14世によりヴェルサイユ宮殿が完成(1682)

天保の改革(1830)

間宮林蔵が樺太を探検(1808)

伊能忠敬が測量を開始(1800)

解体新書発行(1775)

享保の改革(1716)

松尾芭蕉が「奥の細道」を著す(1688)
徳川綱吉が生類憐みの令を制定(1687)

江戸

1900

2000



-1886)

(1813-1883)

(1813-1901)

(1824-1884)

クナー(1824-1896)

ブラームス(1833-1897)

サン=サーンス(1835-1921)

チャイコフスキー(1840-1893)

ドヴォルザーク(1841-1904)

ブッチーニ(1858-1924)

ドビュッシー(1862-1918)

ラフマニノフ(1873-1943)

ラヴェル(1875-1937)

瀧廉太郎(1879-1903)

ショスタコーヴィチ(1906-1975)

ストラヴィンスキー(1882-1971)

プロコフィエフ(1891-1953)

キクタ(1941-)

本書で詳しく解説

アメリカ同時多発テロ(2001)

湾岸戦争・ソ連崩壊、ロシア連邦成立(1991)
東西ドイツ統合(1990)

イラン・イラク戦争(1980-1988)

アポロ11号が人類史上初月面着陸成功(1969)

ケネディ大統領がテキサス州ダラスで暗殺される(1963)
ベトナム戦争(1960-1975)サンフランシスコ平和条約締結(1951)
北大西洋条約機構(NATO)設立(1949)

朝鮮が大韓民国と北朝鮮に分裂(1948)

第二次世界大戦(1939-1945)

ヒトラーが総統になる(1934)

世界恐慌(1929)

ソビエト社会主義共和国連邦誕生(1922)

国際連盟発足(1920)

ロシア革命(1917)

第二次世界大戦(1914-1918)

ライト兄弟が飛行機発明(1903)

ギリシャで第一回オリンピック開催(1896)

パリのエッフェル塔完成(1889)

ドイツ全土で鉄道開通(1880)

エジソンが蓄音機発明(1877)

ドイツ帝国成立(1871)

ノーベルがダイナマイト発明(1867)

イタリア王国建国(1861・アメリカで南北戦争(1861-1865)
ダーウインが「種の起源」を著す(1859)

中央省庁再編で総務省設置(2001)

国際音楽学生交流協会発足(1992)
昭和天皇崩御により平成へ改元(1989)

東京ディズニーランド開園(1983)

沖縄返還(1972)
日本万国博覧会(大阪万博)開催(1970)東京オリンピック開催・東海道新幹線開通(1964)
自治省設立(1960)
東京タワー完成(1958)自治庁設置・湯川秀樹博士が日本人初のノーベル賞受賞(1949)
日本国憲法公布(1946)

広島と長崎に原爆投下(1945)

太平洋戦争(1941-1945)

日中戦争(1937-1945)

五・一五事件(1932)

大正天皇崩御により昭和へ改元(1926)

関東大震災(1923)

明治天皇崩御により大正へ改元(1912)

日露戦争(1904-1905)

日清戦争(1894-1895)

大日本帝国憲法発布(1889)

西南戦争・東京大学設立(1877)

富岡製糸工場完成(1872)

明治維新(1868・戊辰戦争(1868-1869)
大政奉還(1867)

桜田門外の変(1860)

日米和親条約締結(1854)

明治 大正 昭和 平成

バッハ (1685-1750)



代々優れた音楽家を輩出した家系で、200年の間に53人もの音楽家がドイツ各地で活躍した。9歳の時に両親を相次いでなくし、8人の兄弟は親戚にばらばらに預けられた。バッハは長兄の家に引き取られることになったが、聖歌隊の合唱隊員として活動し、その後はヴァイオリン等ひたすら音楽の勉強に励んだ。18歳でアルンシュタットという町の教会のオルガン奏者に採用されたが、ここで

有名な作品の一つ「トッカータとフーガ」が生まれた。

バッハは大家族の愛情深い長であったが、一方、頑固一徹で、かんしゃく持ちだった。プライドが高く、意志の強い、しかも自分の権利に固執するタイプであったようだ。

38歳でライプツィヒに移り聖トマス協会でカントル（教会のための作曲・演奏・合唱団の指導、また付属学校の教師も兼ねる）の地位を得た。

モーツァルト (1756-1791)

彼の神童ぶりはクラシックファンでなくても世界中の多くの人たちに知られている。

6歳の時には3年半かけて家族でヨーロッパへ演奏旅行に出かけた。当時の限られた交通手段を考えると、大変困難な旅行であったことは容易に想像できる。しかし父は「神からの賜り物」としかいいようのない天才を広く世の中に示すことこそ自分のつとめであると考えた。この旅はモーツァルトの将来的な安定を得るための「職探し」の旅という側面もあった。モーツァルトは晩年の10年をウィーンで過ごすまでは、ザルツブルクを拠点として旅に明け暮れた。

25歳の時、ウィーンで音楽家生活の第一歩を踏み出し、オペラ「後宮からの誘拐」が大成功をおさめた。コンスタンツェと結婚し、多くのピアノの弟子を抱え、演奏会も盛況をきわめたこの頃、「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」等数々の名作を世に出した。しかし一方で、生活が急激に窮乏しはじめたのもこの頃と言われている。

その理由には諸説あるが、プライベートではコンスタンツェの6度にわたる出産費用とそのうち4人を亡くしてしまったための葬儀費用や度重なる転居、また、演奏会に招かれることが急激に減ってしまったことなどが一因とされている。また、当時流行したギャンブルにおぼれたためではないかという説もある。

ベートーヴェン (1770-1827)



祖父は宮廷楽団の楽長で、父はテノール歌手という音楽一家に生まれた。父は酒乱であったが、ベートーヴェンをモーツァルトのような神童に育て上げ大金持ちになる野心を抱いていた。ベートーヴェンは過酷なレッスンに耐え、めきめきとピアノの腕を上げていった。

21歳でウィーンへ留学し、抜群の即興演奏でピアニストとしての成功を確実なものとした。一方、作曲にも積極的に取り組み、更には貴族の令嬢たちにピアノを教えたりもした。そこで愛が芽生えることもしばしばあったが、当時、音楽家の身分は低く、この身分の壁がいつも彼の恋を邪魔した。それでもベートーヴェンはおかまいなしに手が届かないとわかっている女性たちに恋をし続けた。ベートーヴェンは当時既に名の通った音楽家であったが、これらの恋が結婚へと発展することはなかった。彼自身もあまり結婚願望は強くなかったようである。

ベートーヴェンはハイデルにも作曲の理論を教わった。しかし温厚

な性格のハイデルと気性の激しいベートーヴェンは折り合いが悪く、あまりよい師弟関係ではなかった。

ウィーンに来て7年程たった時から、徐々に耳が聞こえなくなり始める。彼は仕事を失ってしまうのではないかと不安を抱いたが、その苦しさは親友一人にだけ打ち明け、他の誰にも知らせなかった。

一兵士から革命軍の司令官へとの上昇がナポレオンに憧れ、彼を称えるために作られたのが交響曲3番「英雄」である。

53歳の時に名作である第9交響曲を発表したが、実はこの時、もう既に何も聞こえなくなっていた。初演を終えた際、嵐のような喝采が全く聞こえず聴衆に背を向けたまま立ち尽くし、女性歌手に導かれて初めて聴衆の熱狂ぶりを知ったという。

彼の弟の息子カールの養育権をめぐる妻ヨハンナを相手に訴訟を起こしているが、この子の実の父親はベートーヴェンではなかったのかと憶測されている。

ベートーヴェンの葬儀にはシューベルトをはじめ2万人の人々が参列した。

すぐれたアリアを数多く含むオペラ「魔笛」は貴族や宮廷の人に向けてではなく、庶民に喜んでもらえるように作曲されたもの。初演も一流劇場ではなく庶民が主な観客で、毎日多くの市民が押しかけた。

そして「レクイエム」を完成させることなくこの世を去った。

葬儀は最下級の葬儀費用で営まれ、遺体は聖マルクス墓地に正確な場所がわからないほど無造作に埋葬されるという悲しい最期であった。

モーツァルトの作品はヒーリング効果が高いといわれるほど美しい曲が多い。器楽、声楽、宗教曲などありとあらゆるジャンルの作曲をこなし、いずれにおいても今日まで繰り返し演奏される傑作を残している。彼は音楽で人を感動させようとしたのではなく、美しい音楽を書こうとした。映画「ショーシャンクの空に」でモーツァルトもクラシックも知らない多数の囚人が、突然大音量で流された「フィガロの結婚」の女性二重唱「そよ風ふく松の木の下で」にわけもわからず心動かされたように、その音楽の美しさが人の心を打つのである。



ロッシーニ (1792-1868)

14歳でボローニャ音楽院に入学。生涯に39のオペラを作曲し、イタリア・オペラの作曲家として最もよく知られている。24歳で「セビリアの理髪師」、37歳で「ウィリアム・テル」等の名作を世に出した。

37歳で創作の筆を置いたロッシーニは、フランス政府から年金を得て悠々自適の引退生活を楽しんだ。パリの裏社交界の高級娼婦と再婚してからは美食三昧で、新料理の考案に没頭した。その結果、極度の肥満体となり痛風や糖尿病を始めありとあらゆる生活習慣病を患った。

晩年はパリにサロンを開き芸術愛好家たちを招いて毎週のように食

通晩餐会を催した。そこで、「ロマンティックな挽肉」「バター」「アンチョビ」など、食べ物の題名をもつ自作のピアノ曲をフランツ・リストに演奏させていた。ボローニャのハム、ソーセージをこよなく愛し、豚の飼育にも携わり子豚が土の中からかぎ当てたトリュフを七面鳥の腹一杯に詰めて焼き上げたパテ・ド・フォアグラが大好物だった。



シューベルト (1797-1828)



教育者の家庭に生まれ、幼年時代から抜群の英才を発揮した。11歳でコンヴィクト（王立神学校。後のウィーン少年合唱団）に入学し、ベートーヴェンやリストも教えたサリエリに作曲を学んだ。卒業後は父親が校長をしていた小学校の補助教員をしながら創作活動に励みわずか2年の間に300曲以上を書き上げた。初恋の相手テレゼに捧げた歌曲「糸

を紡ぐグレートヒェン」や「魔王」「野ばら」などはこの時期の作品である。

彼には「シューベルトティアード」と呼ばれる力強い味方がいた。これは、優れた歌手やコンヴィクト時代の仲間、詩人等のグループで、シューベルトの人柄や作品を愛し、何とかして彼を世に認めさせようと、音楽会ではシューベルトの作品を積極的に取り上げ、出版社をかげずり回ってウィーンの人たちに熱心に作品を紹介し彼の音楽を広めて評判を高めた。

シューベルトは、お世辞にも美男子とは言えない外見の持ち主で、よく肥えて歯も磨かず無愛想だったので女性には全くもてなかったが、素晴らしい友人に恵まれた。

ベルリオーズ (1803-1869)



ることが出来る)を受賞した。

ところで、ベルリオーズは感受性が強く、激しい感情の持ち主で、狂気染みた性格の持ち主であった。

メンデルスゾーン (1809-1847)

父は有能な銀行家、母はプロイセン宮廷の宝石職人の娘で音楽史上まれに見る裕福な家庭に育った。幼少期より名のある教師にピアノ、ヴァイオリン、作曲を学び9歳で演奏会デビューするなどモーツァルトにも劣らぬ神童ぶりを発揮した。彼の才能が開花したことは経済力による良い師との出会いだけではなく、本人の旺盛な知的探究心も大きく影響している。ベルリン大学に在籍しながら自然科学者、哲学者、神学者などの講義を受けたり、文豪ゲーテを訪ねたりする等、当時第一線で活躍していた文化人や芸術家との出会いによって洗練された知識と教養を身につけていった。また、指揮者および音楽監督としての仕事も早くから始めていた。ライプツィヒの世界最古のオーケストラ、

ベートーヴェンを敬愛し、ベートーヴェンが亡くなる1週間前にやっと作品を見てもらうことができた。

イギリス人の女優スミスンに対する恋愛も異常だった。当時人気の女優が弱冠25歳の貧しい作曲家の求愛に応じるはずもないのだが、彼はあまりにも執拗に彼女のことを追い続けた。スミスンがおそれをなしたのも当然であろう。そして彼女に対する断ちがたい愛と呪いを音楽にぶちまけた作品が初めて書いた交響曲「幻想交響曲」である。

ほどなくしてピアニストのモークと恋に落ち婚約に至るが、婚約者の母によって破局させられてしまう。怒りに狂ったベルリオーズはモーク母娘を殺害しようとするまでに思い詰めた。

その後、30才の時パリで偶然、「幻想交響曲」を聴きに来ていたスミスンと再会し、彼女もこのときは彼の愛を受け入れ結婚することになった。

ゲヴァントハウスの音楽監督として、アンサンブルの発展に大きな貢献を果たした。

「ヴァイオリン協奏曲」は、このオーケストラのコンサートマスターであったダーフィのために書かれた。

メンデルスゾーン家はユダヤ人の家系であったため、言われなき迫害を受けることが多かった。



ショパン (1810-1849)



核の療養に出かけ、同棲することになる。帰国後もノアンとパリを行き来しながら同棲を続けた。

まるで病人のように青白く、つんととがった鼻の持ち主で、男性っぽくない外見をしていた。

リストの紹介で知り合ったジョルジュ・サンド(作家)はショパンより6歳年上の男爵夫人で、恋多き女性であった。出会った当初は夫人の男っぽい風貌(ズボン、葉巻等)に戸惑い、あまり好意を抱いていなかった。その後、恋に落ちた二人はマジョルカ島に肺結核の療養に出かけ、同棲することになる。帰国後もノアンとパリを行き来しながら同棲を続けた。

パリのサロンで知り合った画家ドラクロアはショパンとジョルジュ二人一緒に肖像画を描いている。しかし彼らの関係が終わったとき、皮肉にもその絵は真ん中から真二つに切り裂かれ、それぞれ単独の肖像画になってしまった。ショパンの肖像画はルーブル美術館に、サンドの肖像画はコペンハーゲンの公立美術館に飾られている。

ショパンは音楽生活のほとんどをフランスで過ごしたが、祖国ポーランドがオーストリア支配から解放される日を心待ちにしていた。

彼の遺骸はパリの墓地に埋葬されたが、棺には祖国を出たときから肌身離さず持っていた故郷ポーランドの土がかけられたという。また心臓は祖国ポーランドのワルシャワ聖十字架教会に葬られている。

シューマン (1810-1856)

裕福な家庭に生まれ法律を勉強し大学に入ったが、ピアニストを目指し、フリードリヒ・ヴィークの家に住み込み内弟子として師事した。しかし、自ら考案した指の訓練のための器具で、大切な指を傷めてしまい、ピアニストを断念し作曲家を志すこととなった。

ヴィークの娘クララと恋に落ちたが、クララは父からピアノの英才教育を受け9歳の頃から天才少女として活躍しており、収入も名声も明らかにクララの方が上であった。更に、ヴィークはシューマンの飲酒癖や素行の悪さを問題視しており、二人の結婚には猛反対した。そのため、二人は秘密の文通でひそかに恋を育んだ。しかしながら、一向に結婚の許可を得られず、業を煮やしたシューマンは父親の結婚禁止命令を覆すべく裁判所に訴え出した。その結果、裁判所が二人の結婚を許可したため晴れて結婚することになった。結婚式の前夜シューマンはクララに連作歌曲集「ミルテの花」を贈った。結婚後も二人は交換日記をつけたり、熱烈な愛をうたった手紙をやりとりする等、典型的なおしどり夫婦であった。二人は8人の子供に恵まれた。

また、ある音楽祭で知り合ったヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨア

ヒムを通じてブラームス青年を紹介され、彼らは親交を結ぶこととなった。元々文学青年で詩人を志した時期もあったシューマンはその頃には音楽ジャーナリストになっており、ブラームスの作品を楽譜出版社に推薦するなど、当時まだ若かったブラームスを励まし、色々手助けをした。

晩年、精神障害を患っていたシューマンは、寝巻きのままで家から飛び出し、ライン川にかかる橋から凍り付きそうな流れに身を投げ自殺を図った。この時はかろうじて救出され一命は取りとめたが、その後幻聴などの症状に悩まされ精神病院に移されそのまま生涯を終えた。残された彼女は演奏活動の収入で子供たちを養わなければならなかったが、ブラームスが経済的にも常に力となって彼女を支え続けた。実は、音楽祭でシューマン夫妻に会った時、ブラームスがクララに一目惚れしたという逸話もある。



ご本人登場!



ワレリー・キクタ
作曲家
国立モスクワ音楽院教授

日本の皆様、こんにちは。作曲家のワレリー・キクタです。バッハやベートーヴェン、そしてチャイコフスキー等、歴史上に名を残す巨匠達と一緒にこのパンフレットで紹介されることを誇りに思います。また、シュタコーヴィチ氏は生前お世話になったこともあり、氏のことを懐かしく想い出しています。

さて、私は作曲家ですが、作曲家にとって最も大切なことは何だと思いますか?勿論、音楽の勉強はとても大切です。しかし、それだけでは人を感動させる作品を創ることはできないと私は考えています。このパンフレットに紹介されている通り、巨匠達はその人生

において様々な経験をしています。中には強烈な個性の持ち主もいます。私は、作曲家にとって大切なことは、とにかく色々な経験を通じて、人よりも深く喜怒哀楽を感じるのだと思います。自然と触れ、恋愛をして、色々な国を訪れ、美味しいものを食べて、様々な文化に触れること、これらは全て人格形成の基礎になることでありとても大事な事です。

貴国には貴重な伝統文化と素晴らしい自然がたくさんあると聞いています。今後多くの素晴らしい作曲家が育つことを、またいつか貴国のために素晴らしい作品を提供することが出来ることを願っています。

ワーグナー (1813-1883)

ワーグナーは元々、劇作家を目指したが、音楽を学んでからはオペラに傾倒していった。オペラ制作に際しては、そもそも台本は台本作家が書くのが常であったが、彼は自ら台本を執筆した唯一の作曲家である。オペラを、音楽と文学そして美術をも統合した「総合芸術」としてとらえ、その結果オペラは楽劇と呼ばれるようになった。

人格的には、利己的で自惚れが強く、感情的にも政治的にも精神的にも、とりわけ経済的に不誠実だった。事実を自分の主張にそうようにねじまげ、軽蔑する相手を自分のために利用しようとするばかりか、愛する人をも食い物にしたり操縦したりし、巧みな話術をもって自分の欲望や意思を通そうとした。金を出しそうなお人好しな人間を見つくと、誰彼かまわず甘い言葉でだました。踏み倒した借金は数知れないが、恋愛遍歴もかなりのものだった。

当時のバイエルン国王が彼に多大な援助をしたことは有名な話である。ワーグナー作曲の「ローエングリン」に心酔して、彼は尋常ならざる援助をワーグナーに施すようになり、そのために後に国の経済・政治をも揺るがす問題に発展した。まさにワーグナーによって生涯を大きく狂わされたと言える。ワーグナーが63歳の時に彼の楽劇だけ

を上演するためにバイエルン王の援助により建てられたバイロイト祝祭劇場では現在も毎年夏に音楽祭が開催され、彼の作品が上演され、彼の信奉者が世界中から集まる。ちなみに、上演に4日かかるという超大作「ニーベルングの指環」は、この劇場で最初に上演された。

彼は作品の中で、ドイツ的なものに対峙する対象としてユダヤ的なものを攻撃している。それがあのヒトラーに大きな影響を与え、ユダヤ人や共産主義者を排斥したゲルマン民族のみによる帝国を建国しようとするナチズムの原点になったとも言われている。「ニーベルングの指環」や「マイスタージンガー」などのゲルマンの神話や英雄を素材にした力強い音楽は、ナチス・ドイツのプロパガンダ音楽として積極的に利用され、パレードや大きな党大会で何度も演奏された。そのため、現在でもワーグナーの音楽はナチスを連想させるとして嫌悪する人も少なくない。



ブラームス (1833-1897)



コントラバス奏者の父から音楽を学び10歳でピアノ演奏会に出演。13歳頃からは家計を助けるために、酒場などで深夜までピアノ弾きのアルバイトをした。

彼は、書斎にベートーヴェンの胸像を飾るほどベートーヴェンを尊敬していた。19世紀後半のヨーロッパ楽壇では、いわゆる進歩派と保守派が対立して主権を争っていたが、保守派の筆頭にあげられるのがブラームスで

あった。メンデルスゾーンやシューマンの流れを組む派で、リストやワーグナーの主張する標題音楽や総合芸術からは対局にいた。保守派の音楽家達の活動の礎となったのは、15～16世紀の音楽遺産への理解と共感であった。

また、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスの性がBで始まる三人を称して「3B」と言われている。いずれもドイツ音楽を代表する巨匠であり、オペラを以外の殆どのジャンルで数々の傑作を残している点でも共通している。

チャイコフスキー (1840-1893)

裕福な官吏の家に生まれ、当初は法律家を目指した。法務省に勤務したが23歳で辞職し音楽家に転身した。25歳でサンクトペテルブルク音楽院を卒業するという、音楽家としては遅いスタートであった。偶然にも丁度そのころ、親友のニコライ・ルビンSTEINがモスクワ音楽院を創設したので、その教師として招かれた。

バラキレフ、キューイ、ムソルグスキー、ボロディン、リムスキー＝コルサコフ等のロシア民族学派的作曲家たちと親交を結んだ。

大の旅行好きでもあった。パトロンであったフォン・メック未亡人から、37歳より14年間、破格の財政援助を受けるようになり、モ

スクワ音楽院を退職して、一年の半分以上をヨーロッパのホテルで過ごした。イタリアの諸都市とパリがお気に入り、行く先々で劇場を頻繁に訪れ当時最先端の音楽を貪欲に吸収した。パリで見たビゼーのオペラ「カルメン」に深く感銘を受け、身近な人間を深く掘り下げようと「エフゲニー・オネーギン」を構想した話は有名である。



ドヴォルザーク (1841-1904)



30歳を過ぎても無名で貧乏であったドヴォルザークが音楽家として安定することができたのはオーストリアから奨学金を受けるようになってからである。この時、偶然に審査員の一人をつとめていたのがブラームスであった。ブラームスはドヴォルザークの才能に触れ、自ら様々な援助をかけてくれた。その後、ボヘミアのヴィソカー村に別荘を購入したドヴォルザークは、毎年春から秋が終わる

までこの別荘に滞在し、村の人々の世間話に耳を傾け、また異国での出来事を語って聞かせた。そして、村人は外国帰りの巨匠をいつも村中総出で温かく迎えたという。ヴィソカー村での精神的な安らぎがさらに充実した創作へと結びついていった。彼はヴィソカー村で創作に

励みつづ、度々招かれてイギリスを訪れることを永年繰り返し、そして最終的にアメリカへ渡ることになる。

晩年、ニューヨーク音楽院へ院長として招かれ、生まれて初めてアメリカに渡ったが、素朴で人情の厚い故国ボヘミアと比較して、機械的で無機質なアメリカが性に合わず強いホームシックにかかってしまった。一方、ニューヨークでは、独特の発展を遂げた黒人音楽の影響を強く受けるなど、ヨーロッパにはない未知の音楽に触れることができた。交響曲9番「新世界より」はこの時期の作品である。

多くの音楽家が都会での成功を夢見たのとは対照的に、彼の作品の多くを彩る民族的な味わいは神、自然、人間、郷土に対する畏怖と尊敬、そして素直な愛情をベースとしてはぐくまれ、生活感情と切り離されることはなかった。

演奏家から一言!



ナターリヤ・スクリャービナ
オペラ歌手(ソプラノ)
グネーシン劇場オペラスタジオソリスト
ミュージック・ウィズアウト・リミッツ優勝

こんにちは、オペラ歌手(ソプラノ)のナターリヤ・スクリャービナです。私はモスクワの国立グネーシン記念音楽大学で歌を学びました。現在は、グネーシン劇場のオペラスタジオでソリストをつとめています。また、ロシア国内やイタリア、日本でコンサート活動を行っています。昨年、日本を初めて訪れましたが、日本の皆様のあたたかい心や美しい自然に触れて、日本のことが大好きになりました!

さて、歴史上、数々の巨匠達がオペラを作曲しました。ヴェルディ、プッチーニ、モーツァルト、ワーグナー、グノー、ビゼー、ドビュッシーを始め名前を挙げだすとキリがありません。また、格林カ、ムソルグスキー、リムスキー＝コルサコフ、プロコフィエフ、そしてチャイコフスキーと、私の祖国ロシアが生んだ偉大な作曲家

達も忘れてはなりません。

私は、しばしばオペラや演奏会で彼らが世に出した数々の名作を演じ、そして歌います。オペラでは、歌うだけでなく、役柄を演じ、時には踊ることもあります。オペラは総合芸術です。私はオペラを演じるとき、役柄本人になりきろうと努力します。本人の心情を理解し、表情、声、身体全体を使って聴衆に向けて表現します。

私は「エフゲニー・オネーギン」(注:チャイコフスキー作曲のオペラ)に出演する時、ステージ上ではナターリヤではなくタチアーナ(注:同オペラでソプラノが演じる役柄)になります!

日本の若者に、もっと生のオペラに触れてもらうきっかけを作るお手伝いが出来ればと願っています。

ドビュッシー (1862-1918)

貧しい陶器商人の子として生まれる。親戚の手助けによりピアノを学び、なんと10歳でパリ音楽院に入学、本格的に音楽の勉強を始めた。

チャイコフスキーのパトロンとして有名な富豪フォン・メック婦人の音楽教師をつとめ、またヨーロッパ旅行にピアニストとして同行するなど、アルバイト先に恵まれた。

絵画の分野ではマネやモネ、ルノワールなどが登場し印象主義と呼ばれた時代、22歳でローマ大賞を獲得してローマに留学したが、当時の恋人であったヴァニエ夫人が恋しくて2年で帰国したと言われる。因みにヴァニエ夫人は既婚者であった。

かの有名な「亜麻色の髪の乙女」は、当時同棲していたガブリエル・デュポン（通称ガビー）に贈られた作品である。しかし、彼の浮気性

に苦しんだガビーはピストル自殺未遂を起こしてしまう。

そして、苦しい家計状況を支えた妻マリー・ロザリー・テクシエもまた、ドビュッシーの浮気性に苦しめられピストル自殺未遂を起こしてしまう。

ちなみに「喜びの島」は、まだマリーとの婚姻関係が継続している時に、人妻エンマとジャージー島へ駆け落ち旅行に行った際に作られた作品。マリーと離婚後、後にこのエンマと再婚することになるが、エンマとの間に生まれた一人娘シュシュを溺愛し、3歳の時にプレゼントした作品が「子供の領分」である。



ラヴェル (1875-1937)



7歳でピアノ、12歳で作曲を始め、14歳でパリ音楽院に入学した。音楽院では作曲をガブリエル・フォーレに学んだ。

ラヴェルはドビュッシーと並ぶ近代フランス音楽の代表的作曲家であるが、存命中はドビュッシーやサティ同様、フランス楽壇の異端児とされていた。ローマ大賞に挑むも3回続けて落選してしまった。年齢制限ぎりぎりの状態で4度目の挑戦をしたが、サティに心酔していたことや、大胆すぎる和声使用等を理由に音楽界の重鎮たちから警戒されてしまい応募すら認められなかった。しかし、国民から

ラヴェル擁護の大合唱が巻き起こり、かえって知名度が上がり、新進作曲家としての地位を確固たるものとした。

第1次世界大戦が始まると、病弱であったにもかかわらず強い愛国心から空軍に志願したが許可が下りなかった。それでも彼は頼み込んで看護兵として病院勤務を経験した。ピアノ組曲「クーランの墓」は、この戦争で亡くなった親しい知人達の霊に捧げるために作曲された曲である。

その後アメリカに渡り各地を演奏して回った。この時触れた本場のジャズのリズムは以降の作品に影響を与えたとも言われている。

2016年2月、小澤征爾指揮「子供と魔法」が第58回グラミー賞において「ベスト・オペラ・レコーディング賞」を受賞した。

龍廉太郎 (1879-1903)

龍家は江戸時代には日出藩の家老をつとめた上級武士の家柄で、父は大久保利通や伊藤博文等の下で内務官僚をつとめた。

1890年に東京音楽学校（現在の東京芸術大学）に入学し、作曲とピアノを学んだ。1901年にはメンデルスゾーンが設立したライプツィヒ音楽院に入学したが、肺結核を患い帰国を余儀なくされた。帰国後父の故郷である大分県で療養生活を送るが、病状は改善せず2

年後に23歳の若さでこの世を去った。

代表作である「荒城の月」が文部省編纂「中学唱歌」に掲載される等、我が国を代表する作曲家の一人である。



ショスタコーヴィチ (1906-1975)



鉱山技師で熱烈な音楽愛好家の父とアマチュアピアニストの母との間に生まれる。

第1回ショパン国際コンクールでは盲腸炎を患ってしまい、痛み止めを飲みながらピアノを演奏するという波乱に見舞われたが見事上位入賞を果たした。

第2次世界大戦後のスターリン独裁政権下では言論、思想、芸術活動も制限され、すべてが「社会主義的」か否かで評価された時代

であった。当時のソヴィエト共産党からの追求を恐れたシュスタコーヴィチは、誰からも批判の余地のない、政治を支持していると認められるような作品を注意深く作ることに専念するしかなかった。

ちなみに、同じ時代に生きたプロコフィエフやハチャトゥリアンも共産党から厳しく追及を受けた。

ショスタコーヴィチは戦後の困難な時代を器用に生き抜き、15曲もの交響曲を残し、それ以外にも協奏曲、オペラ、バレエ、ジャズ、さらに映画音楽など幅広い分野で数多くの名作を残した20世紀屈指の作曲家である。

キクタ (1941-)

1941年ウクライナに生まれる。合唱を勉強しモスクワ音楽院へ進みフレンニコフ等に師事する。同音楽院を卒業後ショスタコーヴィチの推薦によりモスクワ音楽院で研究職を得た。

キクタは数々のバレエや交響曲を世に出したが、合唱やオルガン、オーボエ、ハープ等の作品も多く生み出しており、ロシアを代表する現代作曲家の一人であり、現在もモスクワ音楽院で後進の指導にあっている。

「エレジートリオ ある建築家の想い出」(オーボエ、チェロ、ピアノ)

は、建築家でもあった公益社団法人国際音楽交流協会前理事長、指宿眞智雄氏の功績を称えて作曲されたが、この曲は「赤とんぼ」と12世紀にスラブ民族の間で復活祭のテーマとして使われていた「主よ来て下さい」という曲をモチーフにしている。



個人賛助会員入会のご案内

気軽に一流のクラシック音楽に触れる機会を、日本の隅々にまで提供することを目的に、当協会では1992年から2015年までの24年間で、北海道から沖縄県に至るまで41都道府県104市区町村において289回のコンサートを開催して参りました。

全てのコンサートは、日本政府関係各省庁や開催各地の地方公共団体をはじめ、各種団体、民間企業のご支援等により、入場無料として開催することができました。コンサートに参加された国民の皆様からは、「とても良いコンサートであった」と高い評価を頂いております。

また、当協会は平成26年10月に公益社団法人の認定を受け、より活発な活動を目指しているところです。

公益法人制度改革を経て、より一層の法人自立が求められている中、この素晴らしい事業の永遠の存続と更なる発展を期して、一人でも多くの国民の皆様方に、個人賛助会員へのご入会を通じて、当協会の活動をご支援頂きたいお願い申し上げます。

【個人賛助会員に関する詳しいお報せはコチラ】

<http://www.imea.or.jp/web/support>

クラシックって楽しいな！ (作曲家にまつわるエトセトラ)

制作：公益社団法人国際音楽交流協会
武田薬品工業株式会社
学校法人桐蔭学園東北福祉大学
サントリーホールディングス株式会社
株式会社大原の里
ダイキン工業株式会社
本願寺
影近設備工業株式会社
大阪ガス株式会社
アステラス製薬株式会社
井村屋グループ株式会社

助成：一般財団法人日本宝くじ協会

協力：株式会社コスモ・アーツアンドテクニクス

挿絵：指宿京

発行：2016年8月

宝くじは、みんなの暮らしに
役立っています。



宝くじは、図書館や動物園、
学校や公園の整備をはじめ、
災害に強い街づくりまで、
みんなの暮らしに役立っています。

一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。

一般財団法人
日本宝くじ協会
<http://jla-takarakuji.or.jp/>

